昭和幼稚園だより

昭和幼稚園は昭和４年（１９２９年）３月２０日に静岡県の認可を受け、９３年にわたって幼児教育をおこなってまいりました。卒園生は１１４１２名になります。当時浜松市には幼児教育の施設は数える程しかなく、初代園長橋田光顕が幼児教育の重要性を鑑み寿量院の境内に開設いたしました。戦後新しい教育観に基づく幼児教育を２代目園長橋田正顕が絵画教育や音楽教育や体育教育などを核として推進してまいりました。全国的にも注目を集めていました。

私が幼稚園に入った約３５年前、幼児教育の方法が大きく変更した頃でした。いわく「発達に即して」だとか「遊びを中心にして」だとか「幼児の自主性」だとか、そんな語句が＜お題目のように＞溢れていたように思います。そしてそれらの語句の概念規定＜定義＞がほとんどされてなく、「曖昧」なままの状態であったように、そして現在もそのように思われます。
その頃の指導書の類を見ると、教師主導の保育であるにもかかわらず「音楽遊び」、「体育遊び」、「〇〇遊び」と称しているものが多く見られました。また幼児の自主的な活動には教師は傍観的な立場を取るべきといったような記述も見られました。

園児と接していく中で、「遊び」を考察していくことができました。「遊びの状態の開始」の条件、「遊びの状態の終息」の条件など「遊びを中心した」保育にとって有益なことも得られました。そして「遊び」を構成する要素として「心理的な」面だけでなく、物、場所、「空間」の重要性にも気付かされました。学校にみられるただ広いだけの運動場は子どもにとっては有益な空間ではなく、＜ごちゃごちゃ＞と物がある＜閉じた＞空間が子どもにとって重要であることがわかり、教室内や園庭の構成にも活かされてきました。

園児と接していく中で、「発達に即して」という面では、身体発達、特に肩－肘―手首―手先といった腕の発達の過程とそれに伴う道具の関連が私にとって大きな「発見」でした。腕の発達に応じた道具（楽器、筆記用具、体育用具など）の使い方を通して、音楽、描画活動、運動などの諸分野を統一的に考察できることに繋がりました。

音楽教育においては私の姉である教頭だった瀬尾美智恵が音大を卒業して幼稚園に入った昭和４０年代以降、太鼓などを使ったリズム活動（園児と教師との掛け合いで物語、リズムを作っていく）やマリンバ（大型木琴）の合奏などを展開していきました。瀬尾が病気で引退した後は橋田恵子を中心としてそれまでに築いた方法に基づいて奏でて＜楽しい＞音楽を目指してきました。

園児の描画活動を通して、幼児の認識過程の変化を見ることにも繋がりました。
３歳児の頃まで「頭足人」を描きますが、なぜこのような表現をするのだろうか？
私たちが置かれている３次元（時間軸も含めれば４次元、あるいは心理的な面も含めればもっと多次元）の世界を２次元の紙に表す方法に大人とは異なった幼児なりの方法を作り出していることを見出しました。大人の体系と幼児の体系、どちらが優れていることではありません。ピカソなどにみられる現代の表現には幼児の方法と類似なこともあるものです。持ち帰っているお子さんの絵を大切にしてください。アルバムにはほんの３点ですが掲載しています。

こんな教育方針に基づいて、毎日の保育や運動会、音楽会、作品展などの行事に園児達と一緒に活動してきた教職員のみんなの力は大きなものです。園児とともに教職員も成長していったと思っています。教職員に感謝です。

建物や法人としての昭和幼稚園はなくなりますが、人生１００年の時代、卒園生の心の中にまだ数十年は生き続けることをもって幸と思う次第です。

（４月以降もホームページやblog＜幼児教育あれこれ＞は続けていくつもりです。更新の頻度は少なくなりますが、どうぞ引き続きご覧ください。）

＜学校評価＞をお知らせします。学校関係者評価委員は今年度のPTA総務と園役員の評議員です。

２０２２年３月１７日　　園長　橋田匡邦